

＜議事録＞

第11回「東日本大震災 子ども・学校支援チーム」会議（案）

日 時：2013年8月9日（金）16:30－17:50

場 所：福岡ガーデンパレス

出席者：12名

《敬称略》石隈（会長）・原田（長崎）・藤岡（京都）・藤田（奈良）・藤友（北海道）・小泉（福岡）・  
緒方（熊本）・小野瀬（徳島）・杉山（宮城）・田村（茨城）・梅宮（福島）・山口（茨城）

資 料：資料1,2

※巻末：資料名一覧参照

＜＜会議概要＞＞

I. 現況報告、他

1. 福島県（石隈利紀士会会長、福島支部：梅宮支部長）

- （1）被災支援者として支援会議に参加すること
- （2）子ども・家庭・学校の抱える問題
- （3）放射能の状況

2. 茨城県（茨城支部：山口豊一支部長、田村節子副支部長）

- （1）統廃合の影響と問題
- （2）放射能の影響と問題：風評被害とホットスポット
- （3）教師の疲労と支援の必要性

3. 宮城県（宮城支部：杉山雅宏氏）

- （1）活動の記録化の試み：会員を対象としたアンケートと座談会の実施
- （2）復興景気の影響を受けて仙台市内で生じている問題
- （3）転校生への支援

4. 岩手県（藤岡秀樹常任幹事）

- （1）高校進学・入試に関して生じている問題
- （2）防災教育の重要性
- （3）情報共有・問題意識の格差：全国的な視点から

5. 学校心理士会年報での震災特集の継続について（山口支部長）

II. 本会議のまとめ

- ①事実の共有化と記録
- ②子どもたちのレジリエンスへの支援
- ③支援者（教師・家族）への支援

＜＜巻末：資料名一覧＞＞

## I. 現況報告、他

### 1. 福島県（石隈利紀士会会長、福島支部：梅宮支部長）

#### （1）被災支援者として支援会議に参加すること

《被災支援者として、梅宮先生の経験から》

地震直後…避難所を回り、状況の把握および必要なものが何かについて探った

PTSD への初期的な対策に関する知識を、マスコミを通じてリリースした

その後… “やらなければならない” という気持ちの反面、「(何も) できなくなった」

支援チームにも参加しにくい気持ちから、「参加できなかった」

↑

被災支援者の心（「支援しなければ」という思い、義務感、虚無感）を体験した  
前回会議…上記の気持ちを報告し、救われた気持ちに変わる。

- ・状況を我々に伝えてくれるだけで構わない

《重要なこと》

【 これからの支援の指針を作っていくためには、記録を残すこと  
『被災地にいなければわからない』 ことがあるということ  
子どもの困っていること、ニーズ、変化を教えてもらい、一緒に考えること  
厳しい状況下で頑張っている子どもの様子を教えてもらい、記録に残すこと

- ・（報告によって）被災支援者の大変さを認識する必要性に気づくことができた

⇒現場の先生方への支援は大きな課題

#### （2）放射能の状況

- ①現在の福島の線量…市役所前は 0.4 マイクロシーベルト（※0.1 マイクロシーベルトが基準）

除染は漸次進められているが、山野の窪地、側溝、雨どいは数値が高い

- ②風評被害について

桃：昨年⇒風評被害の影響で売上げが芳しくない 今年⇒異常天候の影響で生育が芳しくない

米・野菜：風評被害の影響（古米の方が売れる、地産の野菜が敬遠される）

#### （3）子ども・家庭・学校の抱える問題

《課題》

- ・繰り返しの転校を経験している子どもへの支援（学習面・人間関係）
- ・バラバラに生活する家族（e.g., 仕事や学校の関係から、父と兄はいわき市、母と妹は会津市）
- ・一時金の使途（e.g., 無計画な浪費による経済的な厳しさ、周囲の冷たい視線）とそれに対する支援者側の戸惑い
- ・学級内で個々に異なる「安心感」への対応（e.g., プールに入る子と入らない子、給食を食べる子と食べない子）

### 2. 茨城県（茨城支部：山口豊一支部長、田村節子副支部長）

#### （1）統廃合の影響と問題

急速に進む統廃合（背景：地震による校舎の被害、子どもの減少）により生じた問題

- ・異動しにくい先生と異動しやすい先生の差
- ・急な担任の変更による生徒の戸惑い
- ・スクールバスでの通学への戸惑い：朝練問題（バス通は参加できない）、登下校での学びの喪失

## （２）放射能の影響と問題

### ①産業への影響

e.g., しいたけ、たけのこ、ひらめ、イノシシ→線量が高く、出荷停止状態

震災時の天候の関係で、線量が高くない地域（日立太田市）もあるが、風評被害の影響は受ける

### ②ホットスポットの存在

守谷市や取手市は線量が高い（市の経済的な事情から、除染が遅々として進まない）

点在する「立ち入り禁止地域」（e.g., 学校の目の前にある竹藪）

給食の放射能の測定→不十分なサンプリング（地区内の一つの学校の給食を測定）

## （３）教師の疲労と支援の必要性

### ①教師の疲労の特徴

- ・震災直後…休みがない状況（被災による校舎の移動、等）

→身体に出る（疲労からくる骨折、等）→気が張っているので動くことができていた

- ・教師集団の特徴による差異…大規模校（教師の人数が多い）・平均年齢の若い学校→チームで動ける  
小規模校（教師の人数が少ない）・平均年齢の高い学校→休職者が多い

- ・保護者のクレームによる教師の疲労

- ・教師自身の家族よりも学校の子どもたちを優先⇒教師の疲労度は計り知れない

★蓄積された疲労が懸念される

### ②教師のバーンアウトへの対応の必要性（石隈会長）

《バーンアウトへの対応のポイント》

今までやったことが無駄ではないという振り返り

今後の見通しや希望

適度な休息

## 3. 宮城県（宮城支部：杉山雅宏氏）

### （１）活動の記録化の試み：会員を対象としたアンケートと座談会の実施

#### ①アンケートの実施

目的…宮城県の学校心理士会会員の方々の活動を記録として残す

方法…時期：昨年度3月末、対象：宮城県の士会会員、

内容：「震災後半年・現在」、それぞれどのような活動をしてきた（している）か？

結果…回収率：3分の1（「支援をしていない」のではなく、活動を文字化することが困難だった？）

※現在、結果を集計中

#### ②座談会の実施（予定）

目的…ありのままの姿を記録に残す

方法…時期：今年度10月、対象：アンケートに協力してくれた人を中心に、会員・非会員が参加可能なオープンな座談会

### ③現時点でのまとめの方向性～被災地の子どもたちへの支援とは？～

「心のケア」というよりも、その時々課題に応じた支援をしている実態が明らかになった

「今、目の前にいる子どもたちの課題は何か?」「(それに対して、自分は)何をやってきたか?」

⇒時系列でまとめる

⇒学校心理士の活動と「こんな時に何ができるのか」「何をしたらいいのか」が明らかになる

## (2) 復興景気の影響を受けて仙台市内で生じている問題

### ①被災が甚大だった地区(荒浜地区)と仙台市内の間で生じている格差

荒浜地区の現状:震災以降、手つかずの状態

(背景:復興の見通しが立たず、近隣の海岸がホットスポット)

仙台市内の現状:マンションの乱立(経済的に余裕のある人が移住)

→子どもの人数が急増(特に人気のある学校の学区)

### ②仙台市内で生じている問題

・いじめの急増(子ども相談支援センターの相談業務に携わる人からの情報)

・発達障害の子どもたちへの不十分なケア

⇒保護者のクレーム

・不登校の急増(中学校30人に1人→緊急にSC募集)

☆教育の伝統やシステムが整わない中で生じた問題に対しては、一時的なSCの配置よりも学校教育そのものの充実が効果的なのではないか?

## (3) 転校生への支援(石隈会長)

### ①先行研究

転校する前の学校で受けていた支援が、転校後の学校生活に影響する

(転校の研究は少ないが、今後必要な研究である)

### ②繰り返しの転校の場合

・転校前の学校でよい支援を受けにくい可能性

・転校を繰り返すことで、その子なりの対処の仕方(レジリエンス)が育つ可能性

### ③昨年の夏に福島県の子どもたちを対象に行った調査の結果 ※今年度も実施予定

「震災後、工夫していること、やれるようになったこと(小さな一歩)」⇒レジリエンスへ

e.g., 震災直後⇒節電・節水、

震災後しばらく経って⇒漢字が書けるようになった(小学生)、友達と支えあっている(中学生)

※転校の経験を通して、自分がどのように成長していると感じているのか?を現在検討している

石隈会長のゼミでは、福島県から山形県へ転校した子および福島県内で転校した子を対象に調査を行っている

## 4. 岩手県(藤岡秀樹氏)～岩手県教育センター研究発表会に参加して～

### (1) 高校進学・入試に関して生じている問題

募集人員を減らしているにも関わらず、今年度、公立高校の倍率が1倍を切った(0.9倍)

背景:他県への流出、進学の断念←物理的・経済的事情(統廃合による長距離移動と高額なバス代)

※高校進学においては、被災地から他県に転校した子どもおよび家族にとっても重要な問題

⇒「学力」以外の視点（地元に戻るかどうか）での苦悩

## (2) 防災復興教育の重要性

- ・教員を対象とした研修会で、震災時の映像や、釜石の奇跡に関する映像を見てもらった  
⇒視聴後の感想では、防災教育の必要性が多く挙げられた
  - ・各地の地震の可能性の高い地区、原発のある地区⇒当事者であるという意識を高めることが重要
- ☆被災地以外であっても、震災に関する情報を発信し「伝える」ことで、防災に関する知識や子どもたちへの震災時の支援（安心・安全の確保、ストレス対処、等）に関する意識が高まる

## (3) 情報共有・問題意識の格差：全国的な視点から

- 被災地（ローカル）：地元新聞（e.g., 岩手日報）には、震災に関する記事が日常的に掲載されている  
※地元新聞は、個人名が掲載される←地元の人にとっては重要な情報源
- 被災地以外（全国）：震災に関する記事（全国紙）を日常的に目にすることがないのでは？

⇒情報の格差が生じている

⇒意識の薄れや風化につながる懸念

課題：情報発信の必要性

～すべての学校心理士が被災地で生じている事実を共有し、支援につなげるために～

◎チーム支援会議で話し合われていることや行っていること

◎被災地それぞれ被災の状況が異なっていること、またそれらに対して学校心理士がどのような活動をしているか

※被災地から物理的に離れば離れるほど、また時間が経てば経つほど、忘れてしまう

↓

たとえば、学校心理士会のHPのあり方についても検討する必要がある

## 5. 学校心理士会年報での震災特集の継続について（山口支部長）、他

### (1) 学校心理士会年報での震災特集の継続

年報の編集委員会にて…震災の特集について話し合った結果、特集を継続することに決まった  
今年度は特に、支援を受けた側の視点（岩手県の先生に依頼済）から論文を掲載する予定  
HPだけではなく、年報も含め、発信し、伝えていくことが大切である

### (2) 支援チームへの寄付金

残高：200万円程度

用途：直接的な援助（被災地での研修会・支援）

- ・震災に関する話
- ・支援者の支援（e.g., やったことの確認←教員へのメンタルヘルスの支援に有効）

※用途の範囲とその規定については、今後チームで検討すべき課題である

## II. 本会議のまとめ

### ①事実の共有化と記録

\*共有すべき情報：これまでやってきたこと、今やっていること、子どものニーズ  
(情報発信の媒体…学校心理士のHP、子ども・学校支援チーム会議、等)

\*記録することの重要性：支援チーム会議の開催、年報での特集の継続、学会発表

## ②子どもたちのレジリエンスへの支援

学校心理士の強み＝子どもの日々のニーズに応じながら支援していくこと、

学校生活を支援すること

(含、転校生への支援、子どもたちのレジリエンス・成長への支援)

## ③支援者（教師・家族）への支援

学校心理士の大きな課題＝現場の教職員や家族への支援

## 《巻末：資料名一覧》

資料 1：「宮城県の子ども・学校の現状」（西野美佐子氏より）

資料 2：「教育 宮城を支える子どもを育成 いじめ撲滅へ、まずは実態把握から」（『2013 宮城ふるさと BOOK』から抜粋；氏家氏より）